

## 省力減農薬育苗の決定版 プール育苗

### 準備するもの

- ・厚手のビニールシート（ブルーシート等）。16箱／坪が目安です。
- ・プールの額縁となるような板（高さ10cm以上）と板を押さえる杭等。

### プールを作る

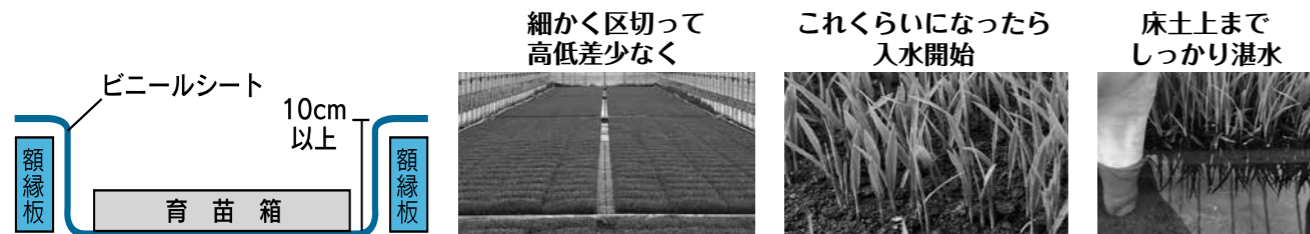
- ・ハウス内地面を出来るだけ水平に均し、シートを広げる。
- ・育苗箱を並べてから、育苗箱の周囲を板等で押さえてプールを作る。
- ・プールを細かく区切ることで高低差少なくできます。

### 管理

- ・プールへの入水は緑化期後1.0~1.5葉になったら、床土上まで入水します。
- ・箱下に水が無くなる部分が現れたら注水し、湛水深は床土上1cmまでとして、草丈の1/3以上の深さにはしません。
- ・プール育苗は草丈が伸びやすいので、低めの温度管理とし入水初期から昼夜ともに開放管理とします。ただし、外気温が5℃以下となる場合は保温してください。
- ・落水は、田植え2~3日前におこないます。

### 注意点

- ・床土上までしっかりと湛水しないと病原菌が発生しやすくなります。病害発生した場合は、直ちに落水して通常の育苗管理に切り替えてください。
- ・プールの排水は、育苗ハウス後作残留農薬対策としてハウス内土壌に浸透しないように注意してください。



## 令和7年度 稲作の重点ポイント

「あきたこまちR」は、「カドミウム」をほとんど吸収しない特性を持たせた「あきたこまち」です。栽培にあたっては、従来の「あきたこまち」の栽培方法が基本となるため、新たに気を付けなければならない点、導入しなければならない技術、資材は大きな変更はありません。

### 「ごま葉枯れ病」の発生が心配

砂地など地力が低く、激しく秋落ちするようなほ場や、過去に発生したことがあるほ場では発生の可能性があります。管内ではほぼありません。また、切り替えと同時に大発生することはありませんので、これまでどおり、種子消毒と土づくり、箱処理剤使用によって対策をします。本病が発生していないほ場では使用する箱処理剤も従来品で対応できます。

### 「マンガン」肥料の追加は必要？

土づくりは「あきたこまち」と同様に重要ですが、マンガン質肥料は「激しい秋落ち」が見られないほ場では追加施用の必要はありません。

### これまでのカドミウム対策地域での対応は？

出穂期や成熟期、収量性や品質等は「あきたこまち」と同等で、カドミウム吸収抑制対策が必要な地域で出穂期前後の湛水管理が不要となる以外は、基本的にこれまでと同じ栽培方法で問題ありません。ただし「あきたこまちR」以外の品種では、出穂期前後の湛水管理が必要です。

### 「あきたこまちR」は倒伏しやすい？

「耐倒伏性」も従来の「あきたこまち」と同じなので、出穂後の出伸びなど倒伏のしやすさに変わりはありません。昨年特に「あきたこまち」で早い田植えほ場ほど倒伏が目立ちました。天候の影響が大きいですが、品種問わず草丈が伸びたら倒伏しやすくなります。

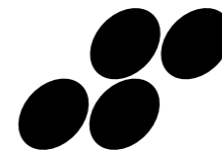
### 「高温耐性」はあるの？

高温耐性は従来の「あきたこまち」と同じ「中」です。R5年の高温登熟年は従来の「あきたこまち」と同様の品質と収量でした。近年は高温登熟が問題となっているため、ケイ酸を中心とした土づくりや飽水管理などの対策は引き続き必要です。

「あきたこまちR」について、詳しくは「秋田県庁ホームページ」をご覧ください。



No. 1



安心のネットワーク  
NOSAI

# 農業技術情報

令和7年3月発行

発行：秋田おばこ農業協同組合／秋田県農業共済組合仙北支所  
監修：仙北地域振興局農林部農業振興普及課



## 令和7年度 稲作の重点ポイント

### 土づくりを起点とした 異常気象対策

収量確保、品質向上のためには「土づくり」を確実に実施していなければなりません。温暖化気象の中での稲作は、目に見えない土の中をいかに稲が育ちやすい環境を作れるかという点が重要です。これまで培ってきた経験値に加えて、今の天候に合わせた生育管理への意識変革が必要です。

#### 1 根活

- 耕深15cm 根が弱くやすいように丁寧に起こそう！
- ケイ酸施用 土中に十分あれば異常気象に負けない！

#### 2 水管理

- 飽水管理 水温上昇を防ぐ水管理を地域で協力して水回しをしましょう！
- 水入替え

#### 3 栄養管理

- イネのことはイネを見る！
- 夏バテしない体力があるのか生育栄養診断を実施。葉色落とすぎないように追肥の検討を。

### 収量性向上は 茎数確保から

将来的に穂になる有効茎を田植え後40日程度でどれだけ確保できるかがポイントです。分けつ促進対策とそれを妨げる要因への対策が必要です。“苗半作”の健苗育成の重要性が増しているほか、温暖化によって異常還元となりやすくなっています。基本技術の再確認と要点を確実に実践することが必要です。

#### 1 異常還元対策

- 乾田化促進 ケイ酸施用
- 飽水管理 健苗育成

#### 2 田植え前後のひと手間

- 健苗育成 活着肥
- 栽植密度、植え込み本数の再検討

濡かせない環境づくりとそれに負けないイネづくりを目指し、分けつ促進させましょう。

### 天災？人災？ 倒伏予防対策

「あきたこまち」の耐倒伏性は「やや弱」であり、これは「R」になっても変わりありません。倒伏対策は、施肥量の検討、生育量の把握と水管理、中干しによる田面硬化と下根伸長があり、どうしてもならない時は倒伏軽減剤の使用があります。まずは、倒れにくい強い稲体を仕上げることに努めましょう。

まずは 倒れない稲容に 仕上げよう

根域確保、ケイ酸の投入 適期田植え、適期中干し

生育栄養診断の実施

生育状況、中干し状況 施肥量、天気予報

総合的に判断し、倒伏軽減剤の使用判断

揃った出芽のために種子予措はより丁寧に。

令和6年産の種子の発芽率は、例年並みの90%以上であることを確認しており、出芽の勢いも変化はありませんでした。揃った出芽のためには、水温・温度管理の徹底が必要です。浸種では、水温10℃以上とし、積算水温にとらわれず必ず種籾の様子を確認しましょう。催芽では、温度ムラを無くするため催芽前の湯通しを推奨します。加えて適正温度（30~32℃）で催芽をします。

安心のネットワーク  
NOSAI から  
園芸施設共済

春の嵐に備えて 水稲育苗ハウスにご加入を！



なんといっても 安心が一番！

被覆、未被覆期間を補償する周年加入です。  
(被覆期間は1ヵ月から選べます。)

※詳しくはNOSAIまで TEL 0187-63-1066

## 作業は計画的に行おう

4月いっぱい低温の危険性があるため、浸種や種まき、育苗は田植え予定日から逆算して行くと、作業に余裕が生まれてきます。田植え後も生育を観察し、適期作業ができるよう、今後の作業を見える化していきましょう。

苗の種類	田植え予定日	育苗日数	播種日	陰干し	催芽	浸種期間
稚苗	5月15日～20日	25日	4月25日～30日	1～2日	播種2～3日前	播種日の13～15日前
中苗	5月20日～25日	35日	4月20日～25日			
自分の計画	5月 日～	田植え日 △育苗日数	4月 日		4月 日	4月 日～ 日

## 病害リスクの少ない清潔な環境づくり

作業場内や育苗施設周辺にある稲わらや籾殻、ほこりには昨年の病原菌が付着している可能性があります。あらゆる病気の伝染源になってしまいます。本格的な作業に入る前にしっかりと清掃を行い、病害リスクを低くしましょう。

### 種子保管

風通しが良い日陰で、直接地面に置かないように注意します。

### 清潔な水を使用

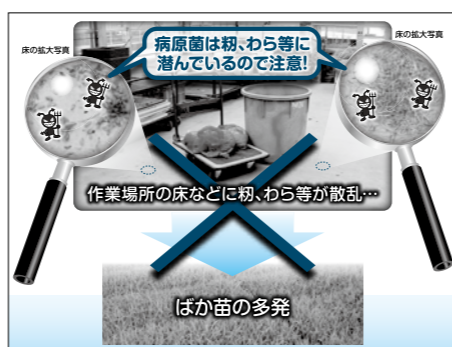
栽培期間中に使用する水は水道水や、井戸水を使用します。

### 品種取り間違いに注意

近年は取り扱う品種が増えてきています。誰が見ても分かるよう品種毎に種子籾袋を札や色等で区別して管理し、取り扱いをします。

### 資材消毒

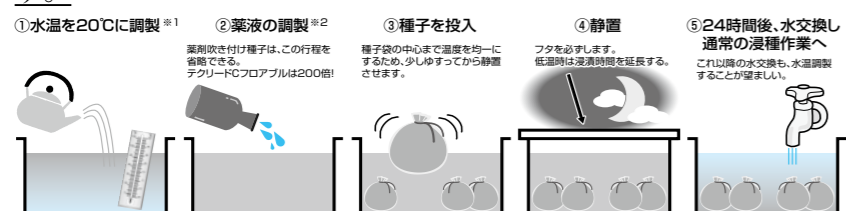
もみ枯細菌病対策として資材消毒剤「ケミクロンG」「イチバン」を使用して、種子予措、育苗作業に使用する器具や容器を全て消毒します。



## 薬剤を効かせる種子消毒

種子更新を必ず行います。ヘルシードやテクリードC薬剤吹付け種子は、浸種により薬剤が水に溶け、それを吸水することではじめて消毒効果が発揮されます。水温が低いと消毒効果が十分に発揮されませんので、最初の水温をお湯で調整する必要があります。

県外産種子を含めて無消毒種子を消毒する場合は防除効果の高いテクリードCフロアブルを使用します。



\*1 種子を投入した際に水温が適温まで下がることを狙って、最初に少し高め水温に調整します。  
\*2 ヘルシード剤、テクリード剤ともに浸種水温10℃以下では薬剤効果が不十分になり生育抑制につながる場合があります。

水量は種子 1 kg : 水 3.5 ℓ

1回目の水交換後、  
2～3日おきに交換

## 温湯消毒種子は清潔に取り扱いを

温湯消毒種子は無菌状態の種子なので、保管から浸種後も清潔に保つことが重要となります。

温湯消毒種子と他の種子は分けて取り扱う。

泥、水、ホコリ、ゴミと触れないように保管。

使用する水は水道水か井戸水。

水量は種子量の2倍。

浸種期間中は基本的に毎日水交換。

浸種期間中は水の循環は絶対に行わない。

### タフブロック使用時の注意点

- ① 催芽直前に200倍希釈液で24～48時間浸種、または催芽と同時に200倍希釈液で24時間処理。(催芽状況により早めに終える場合があるため処理時間に注意する。)
- ② ダコレート、ベンレート播種時処理は行わない。

## 苗いもち防除を確実に実施

いもち病菌は、乾燥状態で稲わらや籾殻に付着し越冬します。育苗ハウス周辺に潜んでいるいもち病菌が苗に移ることで発生を助長しますので、周辺の清掃と種子消毒、育苗期防除を組み合わせることで清潔な環境で作業を行い、本田持ち込みは絶対に阻止します。

薬品名	防除時期	使用基準	使用回数	備考	タフブロック併用
ベンレート水和剤	播種時～播種14日後まで	500倍液 500ml/箱	1回	かん注	×
	播種時～播種7日頃	1000倍液 1000ml/箱			
ビームゾル	緑化始期	500倍液 500ml/箱	1回	かん注	○

※ベンレート水和剤の苗いもち防除時は使用回数1回までです。 ※タフブロック使用種子では使用しません。

## もみ枯細菌病にご用心

育苗期間中が高温となる年が多く、もみ枯細菌病の発生が年々増加しています。もみ枯細菌病は、高温管理で発生が助長され、新葉の基部が白化、苗の基部は褐変腐敗して新芽は簡単に抜けるようになり枯死していきます。もみ枯細菌病は温度管理が第一の発生原因で、その他環境要因が複合的に重なって発生します。また、一度発生すると翌年も発生しやすくなるため、必ず対策をすることが肝心です。

### 対策①テクリードCフロアブルで種子消毒

万病対策は種子消毒から。もみ枯細菌病に登録のある「テクリードCフロアブル」で種子消毒します。ただし、薬液濃度が薄くなると効果が不十分となり病害が発生します。反対に濃いと薬害を引き起こす可能性があるため、正しい薬液濃度で処理をしてください。テクリードCフロアブル：200倍液 24時間浸漬

### 対策②使用する資材を消毒

一度発生させてしまった病害は、病原菌が育苗箱や被覆シートに潜んでいる可能性があります。使用前に「ケミクロンG」か「イチバン」で消毒をしてから使用してください。「ケミクロンG」は金属が腐食する可能性がありますので、処理後は水道水等での水洗が必要です。「イチバン」は水洗い不要です。

### 対策③温度管理の徹底

催芽から緑化期までは「32℃」を超えない管理が必要です。水温、ハウス内温度の管理をお願いします。播種後、育苗器内や無加温出芽被覆物下の床土温度が30℃を超さない温度管理をしてください。また被覆期間を過剰に長くせず、出芽を見たら再被覆はしません。育苗ハウス置床後は過保護にせず、換気を良くして低温気味の管理としてください。

### 対策④エコフィットの使用

昨年、発病した方は「エコフィット」の使用をおすすめします。

【NG例】× テクリードC処理種子で催芽(播種時はOK)

× ダコニールまたはダコレート播種時灌注処理

【その他】育苗培土に有機物が多いと微生物同士の干渉作用

によって発生が少ない傾向にあります。ハイフミンやアズミンを混和するのも対策のひとつです。

「エコフィット」適用表

作物名	希釈倍率	使用液量	使用時期	使用回数	使用方法
稲	100倍	—	催芽時	1回	24時間浸漬
稲(箱育苗)		500ml/箱	播種時		灌注
	10倍	50ml/箱			散布

## 苗立枯病

床土に焼土や人工培土を使用していない場合、タチガレースM剤かナエファイン剤を使用してください。また、育苗期間中は、ハウス内温度を昼間30℃以上、夜間10℃以下にはしません。かん水などによってハウス内が蒸れないように適度に換気を行い、適切な温度・水管理を行い、苗立枯病の発生を防ぎましょう。

使用時期	農薬名	使用量・希釈倍率	散布量(箱当たり)	使用方法
床土混和	タチガレースM粉剤	6～8g/箱	—	育苗培土に均一に混和
	ナエファイン粉剤			
播種時	タチガレースM液剤	1000倍	1ℓ	土壌灌注
	ナエファインフロアブル	1000倍	500ml	
		2000倍	500ml～1ℓ	
は種時又は発芽後	タチガレースM液剤	500～1000倍	500ml	
は種時から緑化期	ナエファインフロアブル	1000～2000倍	500ml	

※タチガレースM剤はピシウム菌とフザリウム菌に効果。  
※ナエファイン剤はピシウム菌とフザリウム菌、リゾプス菌に効果。ただし、出芽後処理はピシウム菌のみ。  
※タチガレースM剤、ナエファイン剤ともに出芽後処理は防除効果が劣る。